

卒業生との交流から ——巣立ったからこそみえる景色

経済学部 塚本 恭章

卒業後もかつての学生と変わらぬ交流を続けることは、とても新鮮であり、有意義です。お互いが「社会人」になり、そこに新たな会話と発見が生じうるからです。本稿は、かつての学生の大学生活について、その後の社会人生活までを含めて教員目線から語り直したものです。

私が2023年9月に刊行した著書『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』の巻末「エピローグ」の「謝辞」で、私は本務校の愛知大学における二人のOBとOG（経済学部卒業生）の名をあげています。故郷の県庁公務員として働いている古市大也君（2015年入学）、金融機関でおカネのプロをめざしている坪島阿紀さん（2016年入学）です。二人に初めて大学で出会ったときのことは今でもよく覚えています。その日から今日に至るまで、定期的な交流が続いているのは嬉しいと同時に、じつは驚きでもあります。母校や母校の先生が過去のものとならず、二人のなかで今なお現在・未来進行形であるからです。

古市君は塚本ゼミの元副ゼミ長であり、坪島さんは二次次秋学期「基礎演習」の履修学生でした。古市君がゼミに所属していた当時の2年間、私のゼミでは、近畿大学、岐阜大学、そして名古屋大学という他大学との知的交流（インカレと合同卒論検討会）を実施していました。みずからは報告担当でないときにも古市君は、他大学のゼミ生の研究報告をノートにびっしりと事細かくメモしていた姿を今でもはっきりと覚えています。一人のゼミ生としての責務と貢献が何であるのかを見定め、皆のために尽力するその誠実な心構えこそは、まさに現在の公務員としてのふるまいそのものであると私は思っ

ています。



県庁前・古市君

坪島さんと私は、本学図書館報『韋編』第46号（2019年）の特別寄稿「書評と本とわたし」でコラボしたことがあります。坪島さんは、書評専門紙「読書人」の大学生「書評キャンパス」に初めて書評というものを書いて掲載していたからです。彼女は、キャリア支援課の動画「未来発見セミナー」でフォーカスされる学生でもありました。



愛知大学前・坪島さん

じつは私自身はここ数年、講義系科目の第1回目でかならず二人の話をすることになっています。二人は公務員や金融系に就職希望の多い本学において、いわば未来のロールモデルになりうる存在であり、現役の学部学生にとっても、二人の学生時代の過ごし方は資するところが多いと考えているからです。同じ大学の先輩が社会で活躍しているという事実に触れることこ

そ、大きな刺激になりうるでしょう。

いうまでもなく二人の学生時代の過ごし方は異なり、就職先の業種も違うわけですから、社会人生活の過ごし方、人生の考え方もけっして同じではありません。とはいえ、あらためて二人の学生生活を私なりに整理し直してみると、そこには明確な「共通点」が浮かび上がってくるのです。それらをここで列挙してみると、

- 1) 大学生生活に明確な「目的意識」があった。
- 2) 大学の「学業成績」の向上に努力した。
- 3) 2年間の「ゼミ活動」をしっかり継続した。
- 4) 質の高い「卒論」をゼミで書き上げた。
- 5) 大学生生活に「資格試験」で付加価値をつけた。
- 6) 友人作り、恋愛で「人間関係」を豊かにした。
- 7) 大学生生活を満喫するために、「アルバイト」や「旅行」で見聞を広めた。
- 8) 自分自身の将来と進路を真剣に考え、「就活」に全力で取り組んだ。
- 9) 就職は「第一志望」を叶え、社会人での日々の仕事に励んでいる。
- 10) 大学生生活は「自分磨き」の旅であり、挑戦の日々であった。

以上の10点は、どこの大学のどの大学生でも多かれ少なかれ日常の学生生活のなかで実践しているものでしょう。では、10の内容の1つ1つを具体的に想定し、それらを明確に念頭に置きながら学生生活を過ごしている学生の割合ははたしてどれくらいになるのでしょうか。10の内容のすべてをクリアして大学を卒業し、社会人になった学生はどれほどいるのでしょうか。重要なことは、学生時代の自分はどこに優先順位を置き、何をめざし、そして実現できたのかを言語化できることだと思います。

こうした10のいわば「古市・坪島マップ」は、大学を卒業して、社会人になって回顧してみたときに初めて分かることなのでしょう。

- 1) の明確な「目的意識」をもち、10) の「自

分磨き」の旅に果敢に挑戦することは、それほど簡単なことではありません。坪島さんは、中高時代から続けている長距離で大学時代に初めてフルマラソンを完走し、4年次にはハワイのホノルルマラソンにも挑戦しました。もちろん見事に完走です。社会人になってからも、体力づくりの一環として「走る」ことを常に心がけて生活しているようです。メールで、「塚本先生も10キロ走りましょう」といわれます。なかなか厳しい要望です（笑）。古市君も、学生時代から社会人に交じって野球に熱心に励んでいると聞いていました。二人が社会人になり、仕事面のハードさや逆境に直面しても、それをクリアしていけるのは、学生時代の「真剣な取り組み」があったからなのです。嬉しいことに、「卒論」をゼミでしっかり書き上げたことが、社会人になってから活かされているとも教えてくれます。

学部時代の交流のみであれば、卒業後、二人がどんな社会人生活を過ごしているのか私には分かりません。大学での「学び」がどう活かしているのか、いないのかも同様に分かりません。卒業生からの「生の声」を聞くことで、初めて大学生時代の学びの真価を知ることができるのではないのでしょうか。そのことを現役の学部学生に今度は私自身が還元し、そこに循環性・継承性のようなものを見いだせればと強く願っています。古市君と坪島さんとは、すでに社会人になってからの交流年数のほうが長くなりました。二人はまだ20代という若い世代です。私自身は、二人をふくむ愛知大学の卒業生から今後も積極的に学んでいきたいと思っています。

第1回目の授業でこのような話をした最後に、私は次のように学部学生に伝えています。じつは10ではなく、もうひとつ11番目の内容があると。いうまでもなくそれは、古市君も坪島さんも、卒業後も母校の大学の先生と良好な関係を築きながら今に至っていることです。



研究室・塚本先生

大学を卒業しても、お互いに「社会人」として人間的交流があるのはとても素晴らしいことであり、現役学生にはそんな「先生」に大学でぜひ出会ってほしいです。同じように「先生」も、そんな「学生」に大学という場所で出会いたいのですから。「学生」はいつだって私にとっての「先生」になりうる存在です。この文章を書きながら、私自身はそうした感慨を深めています。

大学生の学生生活

経済学部 ローレン・ランズベリー

私が大学生生活を過ごしたのは25年以上前のことです。時が経つのは早いって感じですよ！ 25歳を過ぎたら、勢いで過ぎて行くだけです。

実は、日本語のエッセイを書くのは学生時代以来初めてです。はっきりいろいろ覚えていないかもしれませんが、ここでは、日本の学生生活とは違う点を話したいと思います。

私が日本語と出会ったのは中学1年生の時でした。日本の経済バブルの最中でしたので、たくさんの日本人観光客が私の母国のオーストラリアを訪ねてきていました。そのため、多くの中学校で外国語の第二言語として日本語が選択できました。それまで習っていた言語は、全てローマ字のアルファベットを使う言語だったので、日本語のひらがな、カタカナと漢字に凄く魅力を感じました。何か今までとは違う世界を見せてくれると感じました。私はその時、日本語に恋に落ちたのです！ 中学・高校で日本語の勉強が楽しかったので、大学で日本語専攻を選ぼうと思いました。

それで、日本語と日本文化を専攻できる University of Queensland (UQ) に入学しました。(愛知大学と語学研修で提携しています。) 大学は授業が多くてよくアルバイトもしていたので、忙しい毎日であり遊べなかったです。昼間にアルバイトをした時は夜間の授業に通いました。夜間の授業には社会人が何人もいて凄く勉強していたので、授業のレベルが高かった事を覚えています。

UQには映画館、イタリア料理店、郵便局、本屋さん、ATMなど生活設備が揃っていたので生活しやすかったです。社会人の学生のために幼児・小学生以下の幼稚園・保育園もあったので、何歳の学生でも安心して大学に通える便利な環